

「金色の海藻が売れ、おかげで、つぎの研究をする費用ができた。さっそく、それにとりかかろう。こんどは、金のウロコを持つ魚を作りあげよう。海底でふえた金の海藻を食べ、育てる魚。そして、すばしこく泳ぎ、大きくなったら戻ってくるような性質の魚だ。海のミツバチとでも呼ぶべきものだ。このほうが、もっとすばらしいではないか」

盗んだ書類

静かな夜ふけ。エフ博士の研究所のそばに、ひとりの男がひそんでいた。その男は、泥棒だった。

エフ博士はこれまでに、すばらしい薬をつぎつぎと発明してきた。まもなく、また新しい薬を完成するらしいとのうわさだった。男はその秘密を早いところ盗み出し、よそに売りとはそうという計画をたてたのだ。

男は窓から、そっとのぞきこんだ。なかではエフ博士がひとり、むちゅうになって薬をまぜあわせている。熱中しすぎて、のぞかれていることに気がつかない。

やがて、少量の薬ができあがった。みどり色をした液体だった。博士はそれを飲み、大きくうなずいた。

「うむ、味は悪くない。においも、これでいいだろう……」
そして、のびをしながらつぶやいた。

「やれやれ、やっとできた。いままでにわたしは、いろいろな薬を作った。しかし、この薬にまさる薬はあるまい。世界的な大発明だ。さて、忘れないうちに、製造法を書きとめておくとしよう」

博士は紙に書き、それをへやのすみの金庫のなかに、大事そうにしまいこんだ。それから、自分の家へと帰っていった。

待ちかまえていた男は、仕事にとりかかった。注意して窓をこじあげ、なかにしのびこむ。さっき博士がやった通りに金庫のダイヤルの番号を合わせると、簡単にあけることができた。男は書類をポケットに入れ、うれしそうに足どりで逃げ出した。

「しめしめ、これでひともうけできるぞ。博士が飲んだところをみると、人体に害のないことはたしかだ。それに、すごい薬とか言っていた。だが、どんなききめがあるのだろうか……」

その点が、なぞだった。飲んだあと博士がどうなったのか、調べるひまはなかった。電話をかけて聞くわけにもいかない。しかし、エフ博士の発明だから、いままでの例からみて、役に立つ薬であることはあきらかだ。

かくれ家に引きあげた男は、紙に書いてある製法に従って、薬を作ってみることにした。どんな作用があるのか知っていないと、ひとに売りつける時に困るのだ。



原料を集め、フラスコやビーカーも買いととのえた。そして、何日かかかって、問題の薬ができあがった。スズランのような、いいにおいがする。

男はそれを自分で飲んでみた。すがすがしい味がした。男はイスに腰をかけ、ききめがあらわれるのを待った。

そのうち、男は立ちあがり、そとへ出た。急ぎ足で歩きつづけ、ついたところはエフ博士の研究所だった。

「先生。申しわけないことをしました。このあいだ、この金庫から書類を盗んでいったのは、わたしです。わたしをつかまえ、警察へつき出して下さい」

と男は言った。それを迎えた博士は念を押した。

「本当にあなたなのですか」

「そうです。書いてある通りにやっつて薬を作り、それを飲んでみました。そうすると、自分のしたことが悪かったのに気づき、ここへやってきたのです。お許し下さい。盗んだ書類は、おかせします」

男は涙を流してあやまった。だが、エフ博士は怒ろうともせず、にっこり笑いながら言った。

「それはそれは。やはり、わたしの発明はききめがあった。この薬は、良心をめざめ

させる作用を持ったものです。ところが、作ってはみたものの、あとで困ったことに気がついた。実験のために、進んで飲んでみようとという悪人がいないのです。しかし、あなたのおかげで、作用のたしかさが証明できたというわけです。どうも、ごくろうさまでした」

薬と夢

アール氏はある日、友人のエフ博士の研究室をおとずれた。さまざまな器具が並び、薬品のおいがただよっている。アール氏は言った。

「こんどは、どんな薬を作ろうとなさっているのですか」

「夢を見ることのできる薬です。ずいぶん苦心しましたが、やっと試作品が完成しました。これがそうですよ」

と、エフ博士は、そばの机の上にあるピンを指さした。なかには、白い粒がいっぱい入っている。アール氏は、目を丸くして感心した。

「それはすばらしい。そんな薬ができてくれれば、わたしたちの生活は、いっそう楽しいものとなります。好きな夢が、自由に見られるというわけですね」

しかし、エフ博士は手を振って答えた。

「いや、まだそこまでは、むりです。いまのところは動物だけです。これを飲むと、

夢に動物があらわれてくれます」

「なるほど、そうでしたか」

「つぎには、植物の夢を見られる薬の研究です。いずれは、山や海などの景色のあらわれるのも作ります。ひととおりそろったら、それぞれ組合わせる研究ですよ。たとえば、うまく組合わせれば、海岸の松の上をツルが舞っている、というのになるわけです」

「すてきな夢を完成するのも、容易なことではありませんね。で、この粒を飲むと、どんな動物があらわれてくるのですか」

と、アール氏はビンを見つめながら質問した。

「いろいろ作りましたが、みなませてしまいました。馬のもあり、ウサギのもあります。もちろん、ヘビとかハゲタカといった、あまり人気のない種類のはやめました」

エフ博士の話の聞いているうちに、アール氏はためしてみたくなってきました。

「一粒でいいから、飲ませて下さい」

「いいですとも。家へ帰ってから、ベッドに入るまえに飲んでごらん下さい。少しわけてあげますから」



エフ博士は十粒ばかり小さなビンに移し、さし出した。アール氏は聞いた。「人体に影響はないのでしょね」

「その点のご心配なく。何回もたしかめてみました。また、夢のなかで、動物にひつかれたり、かみつかれたりすることもありませんよ」

「どうもありがとう」

アール氏はお礼を言い、わけてもらった薬を持って、大喜びで帰宅した。そして、寝るまえに一粒を飲んでみた。すると、その夜の夢にクマがあらわれた。おとなしいクマで、いっしょに遊んでくれた。背中のにせてくれたり、スモウの相手になってくれたのだ。ちょうど、金太郎になったような気分だった。目がさめてから、アール氏はつぶやいた。

「ききめはたしかだ。ただながめるだけのテレビとは、またちがった面白さがある。

よし。今夜は少し多く飲んで、たくさん動物があらわれる、にぎやかな夢を見ることにしよう」

その晩には三粒を飲んでみた。眠りにつくと、まず夢にネコがあらわれた。毛なみのいい、かわいいネコだ。しかし、それと遊ぼうとしたとたん、つぎに犬があらわれた。ネコはアール氏をそっちのけにして、あわてて逃げはじめた。

犬はほえながら追いかける。そればかりではない。三番目にあらわれたライオンが、その犬を追いかけはじめたのだ。

そして三匹とも、どこか遠くのほうにいつてしまった。それっきり朝まで、夢ではなにもおこらなかつた。

アール氏は、目がさめてから残念がった。

「やれやれ、せっかくの薬を、むだにしてみました。たくさん飲んだから、それだけ面白いというものでもないようだな」

なぞのロボット

エヌ博士は、ひとつのロボットを作りあげた。それから、家にいる時も研究所に
いる時も、いつもそばに置いておく。通勤の途中はもちろん、休日にとこかへ遊びに
ゆく時も、必ずいっしょだった。

博士のあとを、ロボットがひとりで、ついてゆくのだ。ちょうど、影ぼうしのよ
うだった。あまり大きくはなく、やせた形のロボットなので、乗物のなかでも、そう
じゃまにならない。しかし、これがどんな働きをするのかは、博士のほかにはだれも
知らなかった。

ある日、エヌ博士の家にやってきた友人が聞いた。

「いつも、ロボットといっしょなのですね」

「そうです。わたしには、なくてはならないものですから」

「しかし、いつうかがっても、このロボットの働いているのを見たことがありません。

お茶を運んでもこなければ、へやや庭のそうじもしないようですね」

「そんなことのために作ったのではありません」

「いったい、なんの役に立つのですか」

「たいしたことでは、ありませんよ。それに、ほかの人には関係のないことです」

エヌ博士は教えようとしないう。そこで、友人はロボットのほうに聞いてみることにした。

「おまえは、どんなことをするロボットなんだい」

ロボットなら、うそをつかないだろうと考えたからだ。だが、なんと聞いても答えない。友人は、またエヌ博士に質問した。

「このロボットは、耳が聞えないのですか」

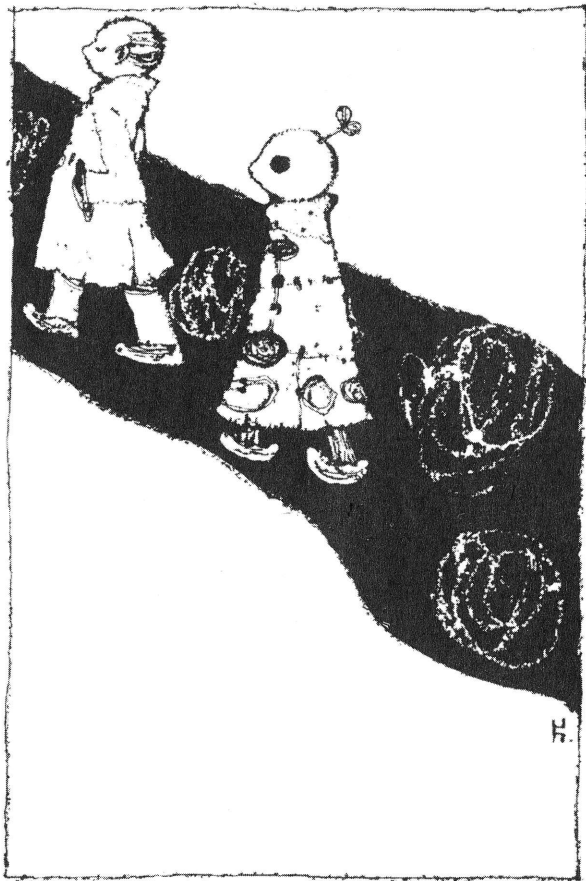
「そんなことはありません」

「では、口がきけないのですか」

「そうです。その必要がないからですよ」

しかし、これだけの説明では、なぞは少しもとけない。

友人は、ますます気になってならなかった。つぎの日、エヌ博士が外出するのを待ちかまえて、そつとあとをつけてみた。



だが、ロボットは博士のあとに従って歩くだけで、なんにもしない。カバンを持ってあげようともせず、博士がハンケチを落しても、注意したり拾ったりもしない。

ついに、友人はある作戦を思いついた。犬をけしかけてみることにしたのだ。いくらなんでも、ほんやり立ったままということはないだろう。

犬は勢いよく、エヌ博士にほえついた。おどろいた博士はあわてて逃げまわったが、ロボットはそれを助けようとしなない。それどころか、いっしょになって逃げるだけだ。このようすを、友人は物かげから見つづやいた。

「なさないロボットだな。本当に役に立たないらしい。へんなものを作ったものだな。わけがわからん」

さらに、研究室へもしのびこんで、のぞいてもみた。だが、ここでも同じように、ロボットは博士のそばにじっと立っているだけだ。友人はこれ以上つづけてもむだだと、調べるのをあきらめた。

夕方になると、エヌ博士は自分の家に帰る。そして、夜になり眠る時間になると、博士は短く命令するのだ。

「さあ、たのむよ」

それによって、ロボットはやっと、ちよつとのあいだ仕事をする。机にむかってノ

ートをひろげ、日記をつけはじめるのだ。たとえば、外出してハンケチをなくしたことや、犬にほえられたけれど、あやうく逃げたことなどを……。

エヌ博士はベッドのなかからそれをながめて、笑いながらひとりごとを言った。

「わたしは日記をつけるのが、めんどくさくてならない。そのため、このロボットを作ったのだ。しかし、こんなことはみっともなく、とても他人に話すわけにはいかない」